

ボードレール
— 父親殺しと兄弟殺し —
〔 I 〕

鳥居大洋

MOESTA ET ERRABUNDA

Dis-moi, ton cœur parfois s'envole-t-il, Agathe,
Loin du noir océan de l'immonde cité,
Vers un autre océan où la splendeur éclate,
Bleu, clair, profond, ainsi que la virginité ?
⁵ Dis-moi, ton cœur parfois s'envole-t-il, Agathe ?

La mer, la vaste mer, console nos labeurs !
Quel démon a doté la mer, rauque chanteuse
Qu'accompagne l'immense orgue des vents grondeurs,
De cette fonction sublime de berceuse ?
¹⁰ La mer, la vaste mer, console nos labeurs !

Emporte-moi, wagon ! enlève-moi, frégate !
Loin ! loin ! ici la boue est faite de nos pleurs !
— Est-il vrai que parfois le triste cœur d'Agathe
Dise : Loin des remords, des crimes, des douleurs,
¹⁵ Emporte-moi, wagon, enlève-moi, frégate ?

Comme vous êtes loin, paradis parfumé,
Où sous un clair azur tout n'est qu'amour et joie,
Où tout ce que l'on aime est digne d'être aimé,
Où dans la volupté pure le cœur se noie !
²⁰ Comme vous êtes loin, paradis parfumé !

Mais le vert paradis des amours enfantines,
Les courses, les chansons, les baisers, les bouquets,
Les violons vibrant derrière les collines,
Avec les brocs de vin, le soir, dans les bosquets,
25 — Mais le vert paradis des amours enfantines,

L'innocent paradis, plein de plaisirs furtifs,
Est-il déjà plus loin que l'Inde et que la Chine ?
Peut-on le rappeler avec des cris plaintifs,
Et l'animer encor d'une voix argentine,
30 L'innocent paradis plein de plaisirs furtifs ?

この詩について私たちは頼るべき註釈を全くもたない。註釈が教えてくれるのは詩題の典拠が未だに発見されていないこと、Agathe という女が謎に包まれたままであること、そしてもう一つ、ボードレールの幼少期にまつわる半ば伝説と化してしまった「幼い恋の緑の楽園」という通念、これだけである。私たちは一切を白紙の状態から始めなければならない。

初連の海のイメージは詩人の一つの過去を私たちに思い出させる。ボードレールは20才の時アフリカ東南端のインド洋に浮かぶフランス島を訪れている。これは *Paul et Virginie* の舞台となった島である。

14年後この体験は *De l'essence du rire* の中に現われる。そこでは論旨の展開に当って一つの対比がもち出されているが、その一方の極には人間の墮落と悪を孕む文明の代表としてパリが、他方の極には無垢の見本として Virginie が、それぞれボードレールによって選ばれるのである。¹⁾

全く同種の対比が韻をふみつつV2とV4に現われているのは注目すべきである。私たちは l'immonde cité の背後にはパリが、la virginité の背後には Virginie が潜んでいると見て差支えない。

この詩と *De l'essence du rire* が発表された1855年はまたボードレールがポウの人と作品の内奥に踏み入った時期である。Annabel Lee に謳われたポウとその妻ヴァージニアとの愛の物語はボードレールに感銘を与えずにいなかったであろう。『悪の華』の詩人と Paul et Virginie とを仲介したのは恐らく、Poe et Virginia だったと思われる。

第2連は分り易いとは言えない。作者の訂正が事を一層面倒にしている。V6, V10はもと

La mer, la vaste mer console nos labeurs.

である。もし海がなぐさめをもたらしてくれるのであれば此の詩の効果は弱められるであろう。作者が全6連の前半と後半を嘆くべき現在と懐しむべき過去の対比によって構成しようとして意識していたことは一見して明白だからである。もっと奇妙なことにV6、V10とそれに挟まれた三行とはV7 démonの一語によって矛盾している。註釈者達はこうした難点に触れたがらない。

私が提示し得る解釈はこうである。La merは≪L'Homme et la Mer²⁾≫に於けると同様ここでも作者の愛人ジャンヌの姓 Lemer とひっかけて使われている。従ってそれはV2 noir océanと無関係ではない。形容詞 noir がジャンヌの肌の色とも結びつき得るからである。V7 rauque chanteuseとV9 berceuseはそれぞれ娼婦サラを歌った≪Je n'ai pas pour maîtresse une lionne illustre;³⁾≫の二つの箇所を参考にして解されるであろう。一つはV25, 26

La pauvre Créature au plaisir essoufflée
A de rauques hoquets la poitrine gonflée,

もう一つはV47

Celle qui m'a bercé sur son giron vainqueur,

である。第2連は著しく性的な色彩を帯びることになる。詩人は身辺にいる愛人の慰めを欲しながらも、それが肉体的なものでしかないのを嘆いているわけである。或いは、作者の書き替えが反語的效果の増大を狙ったと見るならば、むしろこう言うべきであろう、詩人は身辺にいる愛人の慰めが肉体的なものでしかないのを知り尽していながらそれを欲せずにはいられず、欲せずにはいられぬ己れを嘆き、嘆きつつ尚も自虐的にそれを欲するのだと。

この解釈は全6連の構成を崩さず、第2連内部の矛盾を生かして大変好都合なのだが、惜しいことにV6、V10の labeurs に付加された所有形容詞が一人称複数であるという事実に残ってしまう。しかしこの難点は解決不可能という程のものではない。人間が無垢の愛と快楽の支配する楽園を追放され、死と労働(labeur)の支配下に入ったというのは極めてキリスト教的思想だが、詩人は万人の置かれた此の状況を最も痛切に経験⁴⁾するという意をこめて一人称複数が用いられたと考えることもできないではないからである。

第3連では、救いを求めて詩人の発する二つの語 wagon と frégate が共に外来語であるのが注目される。前者は英語、後者はイタリア語だが、ここにイギリスとイタリアという要素が現れているのは重要である。

後半3連では所謂“幸福な幼少時”が喚起される。本人の回想によれば、それは実父の死から義父の出現までの期間である。⁵⁾ ボードレールのこの体験は研究者の屢々取りあげる所だが、論議は専ら義父との関係に終始して、実父の死は一樣に軽視されている。父の死は幼い息子に打撃を与えなかったという此の暗黙の定説は、しかし疑ってみる必要があるように思われる。もしそれが義父への反感を云々する論議と共に、精神分析の所説に基いているつもりならば、明らかにそれは誤解だと言わなければならない。3才から7才に亘るエディプス期に男児は父親を愛すると同時に無意識裡にその死を願う、と確かに精神分析は教えるが、父親の死の実現に対して男児が好感を抱くとも無関心であり得るとも説きはしない。不注意はそればかりではない。エディプス・コムプレクスの概念を適用するのであれば、義父との関係よりは実父との関係により一層の比重を置かねばならない。実父が死んだ時、ボードレールは既に5才10ヶ月だったからである。しかし本人によって主張された義父への敵意は、当然想定されて然るべき実父への敵意から人々の注意を今も逸らせ続けたままである。

後半3連のちょうど真中に当るV 23には、ヴァリエントを調べると興味深い書き替えが行われている。現在即ち『悪の華』再版の vibrant は初版では mourant だったのである。この変更の心的過程はごく単純であって、先ず mourant に対応する動詞 mourir が反対の一致の原理⁶⁾に従って vivre に置き換えられ、次いで、vivre と音が一部類似する vibrant が意識によって採用されたものに違いない。変更を促したのは美的要請であるよりは道徳的要請であるように思われる。楽園の真只中に露出していた死は更めて生によって封じ込められねばならなかったのである。

この推測は第5連に含まれるもう一つの問題を自ずと解決することになる。ここに繰り展げられるイメージをボードレールの生涯と対応させるとすれば、どう見てもそれは実父生前の時期にふさわしいと言わざるを得ない。ボードレールはその時期をずらすことによって自分自身の過去にまつわる周知の伝説を作り出したのである。恐らく無意識的なこの捏造の中に、私たちは父の死と直ぐそれに続く時期との真の姿を記憶に甦らせまいとする無意識裡の努力を見てとることができる。美化の強さは幼い心にもたらされた苦痛の大きさと比例しているであろうが、これ程の反動的美化を説明するには、父を持たぬ子供の無保護感だけでは到底十分でない。

考えられる理由は唯一つしか残されていないように思われる。常識と精神分析とが一致して私たちに教える所によれば、愛しつつ憎む者の心は、愛憎の的となった人物の死に出くわすと、罪責感に囚われずにはすまされない。幼い息子は父の死に対して自分自身を有罪と感じていたのである。⁷⁾

終連は初連と緊密に結ばれている。V 27 *l'Inde* が楽園と関連して現れているのは *Paul et Virginie* の媒介による。⁸⁾ 私たちは更に *la Chine* が現れた理由も知りたいところである。中国はインドとも楽園とも一見無縁のように思われるであろう。

V 27 *la Chine* は V 29 *argentine* と韻をふんでいるが、*argentine* はアルゼンチン *Argentine* と同字同音である。従って V 27 と V 29 の脚韻による結合の背後に私たちはインド、中国、アルゼンチンという地理学的連想を読みとることができる。これは突飛な思いつきではない。少年時代の手紙の中でボードレールは自ら地理学の愛好家だと称している。⁹⁾ 青年時代インドへ行く予定でカルカッタ行の船に乗って出港した直後、海上から母に宛てた手紙¹⁰⁾ は *Robinson Crusoe* に触れていて幾分冒険好きの少年を思わせる口調である。更に後年、ポウの *Narrative of A. Gordon Pym* を翻訳する際、ボードレールが海図を辿りながら仕事を進めたことは、友人達の証言によるばかりではなく、訳文そのものの中に残された歴然たる証拠によって知られている。¹¹⁾ その上、インド、中国、アルゼンチンという三つの地名は或る共通の要素によって貫かれているのである。

ボードレールは 1860 年に *Les Paradis artificiels* を出版しているが、その第 2 章にはハシーシュと関連してマルコ・ポーロへの言及がある。ボードレールとハシーシュとの因縁は彼の 20 代前半に遡るから、『東方見聞録』への関心は随分古いわけである。私たちは此の見聞録が中国と特に縁が深いこと、それが黄金の島チパングに関する記述を含んでいることを知っている。この記述に魅せられてチパングを探し当てようとした人々のうち、インドを目ざした航海者で、エデンの園の探究者でもあったコロンブス¹²⁾ がいたことをここで思い出すならば、V 27 のインドと中国とを結ぶ要素が黄金に外ならないことが分かるであろう。ところで *argentine* = *Argentine* は *argent* に由来する語である。アルゼンチン *Argentine* と *argent* との関係は、同じく南米にあるとされた伝説の国 *Eldorado* と *or* との関係と平行している。そこで私たちは *argentine* = *Argentine* は *Eldorado* を仄めかす為に無意識によって選ばれた代理物と見なすことができるのである。

無論ここでもポウを忘れるべきではない。宝探しを主題とする *Le Scarabée d'or*

や短いバラッド *Eldorado* がボードレールの心を側面から刺戟していなかった筈はないであろう。

ボードレールの地理学的連想のうちインドは自身の体験に最も身近な地点である。ここから発して連想は黄金のイメージに吸い寄せられつつ遠方へ、また心の奥へ向っている。私たちはここで非常に微細な注意力を要求される。連想は始めインド、中国、日本（チパング）という形に向おうとしたのではないかと思われる。しかし黄金の島チパングは何故か黄金の国エルドラドへとふり変えられたのである。理由は恐らく連想が収斂する *Eldorado* の原義が黄金の国 *Le pays de l'or* でなく黄金の人 *Le doré* であることによる。連想は地名と人名の二つの系列を含んでいるのである。地名の方はインド、中国、エルドラド（黄金の国）、人名の方はコロンブス、マルコ・ポーロ、エルドラド（黄金の人）である。人名の系列のうちマルコ・ポーロ *Marco Polo* とコロンブス *Cristoforo Colombo* が初連と関わることは直ちに気づかれるであろう。Polo は Paul (et Virginie) と一致している。Colombo は心が飛び立つという表現を暗に支えることができる。アガートの心は、古来画家達が描いてきた聖霊のように、白い鳩の姿をとって飛び立つのでなければならない。

Eldorado (Le doré) は、これが男性形であることを暫く無視すれば、一応 *V 4 virginité* の背後の *Virginie* と結ばれることもできないではないであろう。ボードレール自身の表現を参考にしてヴィルジニーを *La dorée* と呼ぶことも許されそうだからである。¹³⁾ しかし人名の系列は二人までが実在の人物から成っている。私たちはボードレールの周辺に *La dorée* と呼ばれるにふさわしい実在の人物がいることを忘れてはならない。マルコ・ポーロとコロンブスが共にイタリア人である点を考慮に入れて、イタリアという要素を備えた *La dorée* を求めると、詩人の恋慕の対象で当時イタリアにいた金髪の美女 *La Belle aux cheveux d'or* マリー・ドーブランが浮かんでくる。

女優マリー・ドーブランはフランスを追われてイタリア巡業に出なければならなかった身の上からして *maesta et errabunda* という形容にぴったりの人物である。問題は *Agathe* という名だが、ボードレールには *Marie* を *Agathe* と呼ぶ為の条件も欠けていない。

幼少のボードレールの傍らに *Mariette* という名の愛情深い女中がいたことはよく知られている。¹⁴⁾ *Agathe* は、少くとも無意識の次元では、初め此の *Mariette* と結びついていた名であろう。何故なら、フランス語の *bonne* がギリシア語の *agathé* に相当することを思い起せば、*Mariette (la bonne) — bonne — agathé*

— Agathe という観念の連鎖が得られるからである。しかしその名は或る心的要請の為に Mariette から Marie へと移されねばならなかったのである。¹⁵⁾

1854年末から翌年夏にかけて、マリー・ドープランがフランスを離れていた頃、ボードレールは頻々と住居を変えねばならなかったらしい。54年末と55年春の母に宛てた2通の手紙に私たちは定住の家をもたぬ詩人の嘆きを聞くことができる。《Il me faut à tout prix *une famille*;¹⁶⁾》《Depuis UN NOIS j'ai été contraint de déménager six fois, vivant dans le plâtre, dormant dans les puces —¹⁷⁾》ボードレールも亦マリー・ドープランと同様 *maestus et errabundus* となっていたのである。ところでボードレールは、後半3連に至福の幼少期として喚起された、実父の死から義父の出現までの僅かな間に、母とマリエットに連れられて数度の転居を体験している。父の庇護を失い、罪を背負った身である幼少の詩人は早くも *maestus et errabundus* と呼ばれる資格をもっていたわけであり、その眼に映った母は *maesta et errabunda* だったであろう。形容詞 *maestus* (*maesta*) に対応する動詞 *maereo* が哀悼の表現となり得ることを考えると尚更である。私は転居そのものに大きな意味を与えようというのではない。ただそれは愛する女の不在と結びつくことによって詩人の過去と現在とを一挙に貫き、時の回帰の中に詩人を陥れたように思われる。

マリー・ドープランが身辺から姿を消して遠く離れてしまった時、その不在はボードレールの過去の中から類似の苦痛な体験を呼び出したであろう。母親カロリーヌが *maesta et errabunda* としての短時日の後に、先夫の子ボードレールを後に残して、新しい夫の子を産む為に首都を離れたのは、ボードレールがまだ7つの時のことである。マリエットが傍らにいたとしても、後年の書簡を検討した限りでは、¹⁸⁾ この時幼少の詩人は存在の一部をもぎ取られたも同然だったと推測される。この終生消え去ることのなかった記憶¹⁹⁾の中で、マリーは母と結合したのである。もう一度第3連を思い出してみよう。マリーと母とがそこでは同等に扱われていたのが分かるであろう。²⁰⁾ 先に言ったとおり V 11 *wagon, frégate* はそれぞれイギリスとイタリヤという要素を含んでいる。イタリヤは無論マリー・ドープランと、イギリスは詩人の母と結びつく。母親カロリーヌは英国生れで、ポウの翻訳者としてのボードレールにとっては英語の教師でもあったらしいからである。もう一つ、第3連で見逃してならないのは、時空共に遠方を志向する表現の織目の間に幼時の体験らしいものが透けて見えることである。V 12 *nos pleurs*, V 14 *remords, crimes, douleurs*, この4つの語の心的起源は、母に置き去りにされ、母の愛を奪

おうとする新しい子供を呪い、その子の死によって又一个罪責感を背負い込んでしまった7才の子供にまで遡るであろう。

マリーと母とは *maesta et errabunda* 及び“姿を消した愛する女”という二つの要素を共有しているだけでも詩人の心中で重なり合うには十分だったと思われる。しかし二人が合致するにはポウを経由するもう一つの道があることを忘れてはならない。ポウの母は流浪の果てに幼い息子を残して死んでしまった（姿を消してしまった）女優である。この命題の中に私たちは二つの命題を溶かし込むことができる。即ち、(1) ボードレールの母は *maesta et errabunda* であった後、幼い息子を残して姿を消してしまった。(2) 流浪の女優マリー・ドブランはボードレールを残して姿を消してしまった。ちょうど夢に於て二人の人物が混融されて一人の人物となるのがよくあるように、ポウに打ち込んでいたボードレールの無意識の中で、ポウの母はボードレールの母とマリーとが落ち合う場を提供したであろう。

ポウとの一体感が愈々深まってゆく中²¹⁾で、ボードレールはマリーが首都を離れてイタリアへ去った後、よるべない子供のような悲哀に捉えられたに違いない。その時マリエットが呼ばれたのである。但し今度は、ポウの妻ヴァージニアの母で、娘の死後も義理の息子の母親代りとして、詩人ポウの守護神となった *Maria Clemm* を仲立ちとして。²²⁾ 今ではとくに死者となっていたマリエットが、かつて母という存在の一部をもぎ取られた幼少の詩人の為に欠如を満たすべき母親代りとなったように、成長した詩人の欠如を再び満たすべく、言葉によって不在の中へ招き入れられる。詩人は無意識の導く所に従って、せめてマリエットに由来するアガートという名をマリーに付することで、愛する女が姿を消してしまった悲しみを和らげようとしたのである。それはまた、愛の島シテールへ旅した詩人が其地で凄惨な死を見出すように、²³⁾ 不在のマリーへの恋慕が詩人を幼い頃の不在の母への愛着へ余りに強く引き戻して、死という真実が曝け出されるのを防ぐ為でもあったに違いない。母の愛を独占しようとして、父と弟（妹）の死を願い、二つながらそれを実現させてしまった幼少の詩人は、やがて二つの死を心の中でなんとか打ち消そうとして、その努力の痕跡を数多くの作品の中に刻みつけねばならなかったからである。

ボードレールは自分の生をポウの生涯という濾過器にかけて、これに詩人の運命という思想を与えながら、生の中から作品を汲んでいる。私たちは最後にヴァージニアについて語らなければならない。 *maestus et errabundus* と *maesta et errabunda* との取り合わせは、ボードレールとマリーにもあてはまるが、ポウとヴァージニアにはもっとよくあてはまる。ボードレールはここでも知らず知らずポウの

先例に倣っていたと見るべきである。この点は彼の恋愛感情を考察する上で見逃すことができない。『悪の華』の詩人がマリーに求めていたものは、ポウとヴァージニアのように、或いはポールとヴィルジニーのように、或いはもっと一般に、少年と少女のように愛し合うことだったのである。

註

この註で用いられる略号は以下のとおり。

全集 I, II。プレイアード版ボードレール全集(1975) I, II 卷

FM。『悪の華』再版

SP。『パリの憂愁』

なお、ボードレールの詩で上記二つの詩集に収められていないものについては全集掲載の頁数が記されている。

1) Qu'on me permette une supposition poétique qui me servira à vérifier la justesse de ces assertions, que beaucoup de personnes trouveront sans doute entachées de *l'a priori* du mysticisme. Essayons, puisque le comique est un élément damnable et d'origine diabolique, de mettre en face une âme absolument primitive et sortant, pour ainsi dire, des mains de la nature. Prenons pour exemple la grande et typique figure de Virginie, qui symbolise parfaitement la pureté et la naïveté absolues. Virginie arrive à Paris encore toute trempée des brumes de la mer et dorée par le soleil des tropiques, les yeux pleins des grandes images primitives des vagues, des montagnes et des forêts. Elle tombe ici en pleine civilisation turbulente, débordante et méphitique, elle, tout imprégnée des pures et riches senteurs de l'Inde; elle se rattache à l'humanité par la famille et par l'amour, par sa mère et par son amant, son Paul, angélique comme elle, et dont le sexe ne se distingue pour ainsi dire pas du sien dans les ardeurs inassouvies d'un amour qui s'ignore. Dieu, elle l'a connu dans l'église des Pamplémousses, une petite église toute modeste et toute chétive, et dans l'immensité de l'indescriptible azur tropical, et dans

la musique immortelle des forêts et des torrents. (全集 II pp 528 ~ 529.)

2) FM. XIV.

3) 全集 I pp 203 ~ 204.

4) Tout poète lyrique, en vertu de sa nature, opère fatalement un retour vers l'Éden perdu.

(Théodore de Banville, 全集 II p 165.)

5) Il y a eu dans mon enfance une époque d'amour passionné pour toi; écoute et lis sans peur. Je ne t'en ai jamais tant dit. Je me souviens d'une promenade en fiacre; tu sortais d'une maison de santé où tu avais été reléguée, et tu me montras, pour me prouver que tu avais pensé à ton fils, des dessins à la plume que tu avais faits pour moi. Crois-tu que j'aie une mémoire terrible ? Plus tard, la place Saint-André-des Arcs et Neuilly. De longues promenades, des tendresses perpétuelles ! Je me souviens des quais, qui étaient si tristes le soir. Ah ! ç'a été pour moi le bon temps des tendresses maternelles. Je te demande pardon d'appeler *bon temps* celui qui a été sans doute mauvais pour toi. Mais j'étais toujours vivant en toi; tu étais uniquement à moi. Tu étais à la fois une idole et un camarade. Tu seras peut-être étonnée que je puisse parler avec passion d'un temps si reculé. Moi-même j'en suis étonné. C'est peut-être parce que j'ai conçu, une fois encore, le désir de la mort, que les choses anciennes se peignent si vivement dans mon esprit.

(母宛書簡 1861年5月6日)

6) 精神分析入門第11講参照。

7) 父に対するボードレールの罪責感は少青年時の書簡の検討によって立証可能である。この問題は機会を改めて論ずる。

8) 註1) 参照。

9) 異母兄宛 1833年7月12日。

10) 1841年6月9日。

11) 原作に含まれていた方角の誤りがボードレールの仏訳では訂正されているのがJ. クレペによって発見されている。

12) ゴロンブスはSyphilisを介してボードレールとは因縁の深い人物である。

13) 註1) 参照。

14) cf.

- La servante au grand cœur dont vous étiez jalouse,
 Et qui dort son sommeil sous une humble pelouse,
 Nous devrions pourtant lui porter quelques fleurs.
 Les morts, les pauvres morts, ont de grandes douleurs,
⁵ Et quand Octobre souffle, émondeur des vieux arbres,
 Son vent mélancolique à l'entour de leurs marbres,
 Certes, ils doivent trouver les vivants bien ingrats,
 À dormir, comme ils font, chaudement dans leurs draps,
 Tandis que, dévorés de noires songeries,
¹⁰ Sans compagnon de lit, sans bonnes causeries,
 Vieux squelettes gelés travaillés par le ver,
 Ils sentent s'égoutter les neiges de l'hiver
 Et le siècle couler, sans qu'amis ni famille
 Remplacent les lambeaux qui pendent à leur grille.
- ¹⁵ Lorsque la bûche siffle et chante, si le soir,
 Calme, dans le fauteuil je la voyais s'asseoir,
 Si, par une nuit bleue et froide de décembre,
 Je la trouvais tapie en un coin de ma chambre,
 Grave, et venant du fond de son lit éternel
²⁰ Couvrir l'enfant grandi de son oeil maternel,
 Que pourrais-je répondre à cette âme pieuse,
 Voyant tomber des pleurs de sa paupière creuse ?

(FM. C.)

- 15) その際一つの平行関係が利用されたであろう。大人のボードレールと Marie、小さなポートルールと指小辞のついた Mariette、これである。これは Eldorado (← or) と Argentine (← argent) とのもう一つの平行関係を思い出させる。マリエットの髪の色を知ることができないのは残念である。もし詩人の記憶に留められた彼女の髪が銀髪だったならば、私たちは Marie と Mariette との間に金と銀の関係を打ち樹てることができる。つまり無意識の次元で Eldorado と Argentine との置換は Marie と Agathe との置換と連動していたかも知れないわけである。
- 16) 1854年12月4日。

17) 1855年4月5日。

18) *il me semble qu'il me manque quelque chose; par moments j'éprouve de la maussaderie, je crois que c'est toi qui me manques. Il me manque cette présence de quelqu'un à qui l'on dit toutes sortes de choses, avec qui l'on rit sans aucune gêne — enfin — quoique je sois parfaitement bien, matériellement, je vous regrette.* (母宛 1839年6月10日)

Ma chère mère, ma bonne maman, je ne sais que te dire, et j'ai toutes sortes de choses à te dire. D'abord je sens un grand besoin de te voir. Comme c'est différent d'être chez des étrangers — et ce ne sont pas précisément tes caresses et nos rires que je regrette, c'est je ne sais quoi qui fait que notre mère nous paraît toujours la meilleure des femmes, que ses qualités nous conviennent mieux que les qualités des autres femmes; il y a un tel accord entre une mère et son fils; ils vivent si bien l'un à côté de l'autre — (母宛 1839年7月16日)

類似の感情はボードレールの手紙には屢々現われる。

- 19) ここには母への怨恨と兄弟相剋の感情も含まれる。前者は《La Corde》(SP XXX), 後者は《Le Gâteau》(SP XV) にそれぞれ主題として最も単純に現われている。
- 20) 1854年8月14日の手紙でボードレールは初めて母にマリーの存在を打ち明けている。その話の切出し方は「女に対してなら女のことを語ることができる」とあまり穏当でない表現である。
- 21) 次の二つの表現を比較のこと。

*Ma jeunesse ne fut qu'un ténébreux orage,
Traversé çà et là par de brillants soleils;* (《L'Ennemi》, FM. X.)

La vie de Poe, ses mœurs, ses manières, son être physique, tout ce qui constitue l'ensemble de son personnage, nous apparaissent comme quelque chose de ténébreux et de brillant à la fois.

(*Edgar Poe, sa vie et ses oeuvres*, 全集 II p 309.)

- 22) ボードレールはクレム夫人を絶讃している。

Cette femme m'apparaît grande et plus qu'antique. Frappée d'un coup irréparable, elle ne pense qu'à la réputation de celui qui était tout pour elle, et il ne suffit pas, pour la contenter, qu'on dise qu'il était un génie, il faut qu'on sache qu'il était un homme de devoir et d'affection. Il est évident que cette mère, — flambeau et foyer allumé par un rayon du plus haut ciel, — a été donnée en exemple à nos races trop peu soigneuses du dévouement de l'héroïsme, et de tout ce qui est plus que le devoir. N'était-ce pas justice d'inscrire au-dessus des ouvrages du poète le nom de celle qui fut le soleil moral de sa vie ? Il embaumera dans sa gloire le nom de la femme dont la tendresse savait panser ses plaies, et dont l'image voltigera incessamment au-dessus du martyrologe de la littérature.

(*Edgar Poe, sa vie et ses oeuvres*, 全集 II pp 308 ~ 309.)

23) « Un voyage à Cythère » (FM. CXVI.)